



第百七十三號 (第十五卷)

(昭和十年) 九月號

北海道の日食に備へよ

(卷 頭 言)

四十年ぶりに見られる北海道北部の皆既日食が、いよいよ一ケ年以内に迫つて來た。ロシアの學者たちが廣々としたシベリヤ各地の觀測關係事項を調査編輯したパンフレットも去る七月末には到着した。我が日本も、滿洲國も、ロシアも、三ヶ國何れも、それぞれ國內國外の學術研究進歩のため、本格的に此の好機會の到來を極力善用せられたい。

吾輩は今夏再び北海道を訪ひ、日食地方の地勢風土を視察すると共に、其の地方民諸氏に、珍象を迎える有形無形の諸準備をすゝめることに努力した。再三の注意に拘らず、吾輩をして驚かしめたことは、各地方の一般民衆は言ふに及ばず——否、其れにもまして、指導的位置に立つべき官權や有識者教育者等の人々が未だ此の日食到來のことを甚だ漠然としか認識せず、甚だしきに至つては、「果して言ふが如き日食皆既が起るものか、否か?」などと、まことに呑氣な連中さへある事であつた!

吾輩は此の如き事狀を見て、益々學的宣傳の必要を痛感するものである。そもそも、愈々來年六月の日食の幕が開かれる場合には、各國各地から多くの人數が北海道へ押しかけることは言ふまでもないが、實は日食よりも二三ヶ月以前から天文地學其他各方面の觀測者群が出張して、大小の器械を据え付け、皆既沿線に數百の觀測陣が布かれる筈であるし、尙ほ之れと前後してアマチュアの觀測群も夥しく北見へ殺到することと思はれ、従つて交通通信宿舍等の全能力が可なり早くから活動を餘儀なくせしめられ、愈々六月に入れば一般の觀覽者が數十萬又は百萬の大群となつて北へ北へと詰めよせると豫想せられる。故に、鐵道も、自働車やバスも、汽船も、大小旅館も、

郵便も、電信電話も、放送局も、食料業者も、一齊に立ち上らなければならぬ有様となる。

何と言つても、こんどの日食には、旭川と小樽とが交通通信等の二大中心となるであらう。旭川は陸上観測者たちの参謀本部のやうな形となり、ニウスの放送や、陸上の交通や輸送の中心になると思はれるし、又、小樽は主に海上より日食地へ人や器械類を運ぶための重要港になると思はれる。何れも、兩地の旅館などは、一時にドツと押しよせる多數の人々を適當に接待し、遺漏なきやう、早くから従業者たちの訓練が必要である。

尙ほ、北海道の土着の人々には諸學校や官權を通じて、日食に關する充分なる常識を養はしめ、内地から渡來する幾萬の觀覽大衆を、あらゆる意味に於いて歡迎誘導する準備をしなければならない。之れがためには、今夏、枝幸と旭川とで開かれたやうな日食の講習會や講演會が、今後他の各地に於いても開かれることが必要であるばかりでなく、大小の日食展覽會や博覽會等が可なり長期にわたつて民衆を教育する目的で開かれる必要もあらう。尙ほ、鐵道關係としては、北見の海岸に沿ふて、濱頓別から枝幸、禮文、幌内、雄武の線が一日も早く完成することが望ましいし、又、中勇別からサルマ湖岸を経て常呂や網走に至る線も非常に望ましい一線である。此等の線は皆、當局の計畫中にある敷設豫定線であるのだから、どうせやるものならば、多少其の工事を早めて此の千載一遇の好機に間に合ふやうにすることにより、民衆の利便は勿論、鐵道當局の營業的立場からも必ず首肯されるものと思ふ。北海道の測候所は言ふに及ばず、其の他一般各地の氣象觀測者の特別な責任が今後加はることは勿論であるが、しかし、新たに多くの新觀測所を加へる必要は、今となつてはあまい。

それよりも、新しい認識の下に、プログラム上、特に工夫し、研究して貰ひたいのは放送局である。日食に對する放送局の任務は、學術的にも民衆的にも、重且つ大である。殊に旭川の放送局 JOCG は、最も重大なる位置の自覺の下に、國內國外へのサービスを志して貰ひたいものである。(山本)